



## 若き日に読書を

齋 藤 正 夫

岩波の雑誌「図書」（一九八一・三  
月号）に、椋鳩十（むくはとじゅう）  
氏の随想が載っている。その一部を紹  
介するが、「私は、美しい孫とじいさ  
んの姿が、ありありと目の前に見える  
ような気がした。その場面を思い浮か  
べて、心の中が、ほうと、あたたかに  
なり、幸福に似たものが、心の中にひ  
ろがって行くような気がした。その時  
のハイジとアルムのじいさんとの会話  
がいい。

——おじいちゃん、夕焼けは、なぜ  
あんなに美しいの。

——この世の中で、一番美しいもの  
は、お別れする時の言葉さ。夕焼  
けは、太陽が山にさようならをい  
っている、あいさつの言葉だから  
美しいのさ。

こんなふうな会話の内容だった。六  
十年以上もたった今でも、会話の内容  
だけは、心の中に生きている」とある。

筆者は、受持の先生から借りた「ハ  
イジ」という本を、家の庭続きの松林  
で読み、感動に胸をときめかせながら  
ふたりがアルプスの岩に並んで腰かけ  
て、峰々に映える夕焼けを眺めている  
場面に読み進んだ時の感激を追想して  
書いている。そして、「私は、ため息  
をつきながら、本をひざの上に置いて  
顔をあげた」と述べている。

今は亡き湯川秀樹博士は、その著「  
本の中の世界」で、「……本を読ん  
でいるうちに、本のつくりだす世界に没  
入してしまえたら、それは大きな喜び

である。本を読んでいるうちに、いつ  
のまにか本をはなれて、自分なりの空  
想を勝手に発展させることができたら  
これまた大いに楽しいことである」と  
書いておられるが、椋鳩十氏も、少年  
の日に、このような幸福な経験をされ  
たのであろう。

わたしは、感じやすい時期にある若  
人たちに、良き本との幸福な出会いを  
経験させたく常に読書を勧めている。

川俣高校に勤務していた時、卒業を  
目前に控えた定時制課程のMさんが、  
「夜道」という生徒会誌に、「『次郎  
物語』を読んで思うこと」という感想  
文を寄せ、その末尾を「私は結婚す  
る時も、貴重な財産としてこの本を持  
って行き、子を持つ親の立場になってか  
ら、もう一度、じっくり読んでみよう  
と思っている」と結んでいるのを取り  
上げ、「良い本に出会ったMさんは幸  
福者だね」と、生徒たちに語った。

わたし自身、中学生の時、トルスト  
イの「人はなにで生きるか」を読み、  
ミハイルが「人間はだれでも自分に對  
する心づかいで生きるのではない、愛  
によって生きるのだ」ということを、わ  
たしは知ったのです」とセミヨンた  
ちに語る一節に、激しく心を打たれた  
ことを記憶している。感動は感動の方  
向に人を変えるというが、自分中心の  
生き方を恥じたわたしは、次第に他人  
のこと、特に困っている人々のことに  
強い関心を持つようになって行った。  
(さいとうまさお・福島県立図書館長)